

発達の最近接領域、

上から見るか？

横から見るか？

発達の最近接領域 zone of proximal development

現時点での発達水準と、直近の時点において到達する可能性のある発達水準との間のへだたりを表す説明概念。これら二つの発達水準は、個人が単独で達成できることと、他者との協同やその模倣を通して達成できることにより、それぞれ推測される。

ヴィゴツキー（Lev S. Vygotsky）の発達理論の中核をなす概念の一つであり、彼はこれにより発達可能性という観点から個人の発達水準を評価する方法を提起した。

日本語では「最近接発達領域」とも訳される。

教育学や教育心理学においては、学校教育における体系的な教授の有効性を強調する概念として評価されてきた。一方で、教師や仲間との社会的相互作用によって学習がうながされるとする社会構成主義の理論的根拠としても取り上げられている。

近年は、幼児によるごっこ遊びなど、模倣を伴う遊びの発達促進的な意義を示す概念としても評価されている。

発達の実の診断は、発達のサイクルを終えたもの、その成果だけでなく、成熟期にある過程をも把握できなければなりません。収穫予想をたてる園芸家が、果樹園の成熟した果物の数だけを計算し、果樹の状態を評価せず、まだ熟していない果実を計算に入れないのは間違っているのと同じように、成熟しつつあるものを脇に置いておいて、成熟したものの決定だけに限る心理学者は、発達全体の内的状態に関するいくらかでも正しい十分な知識を得ることは決してできず、対症的診断から臨床的診断に移行することはできないでしょう。

今日はまだ成熟していないが、成熟期にある過程の決定は、発達診断法の第二の課題となるものです。この課題は、発達の最近接領域を見出すことによって解決されます。

知能の指標となるのはただ一つ、もっぱらかれの自力の問題解決と考えられています。問題解決の過程で子どもに誘導尋問がされたり、どのように解いたらよいのかを指示するようなことがあったら、そのような解決は知能年齢の決定では無視されることとなります。

このような考えの基礎には、自力でするのでない問題解決は子どもの知能を判定するうえでなんの意義もないという信念が横たわっています。（中略）何かの知的な操作を模倣するということは、純粹の機械的・自動的な行為であって、模倣者の知能については何も語ることはできないというのです。

（中略）

子どもの知的発達の場合には、この課題は、子どもが上で述べたような意味での知的模倣の能力をどれだけもっているかを明らかにすることによって、解決することができます。

『新児童心理学講義』（新読書社，pp.34-5）

研究は、子どもが模倣できることと子どもの知的発達とのあいだに厳密な発生的法則性があることを示しています。子どもが協同のなかで指導を受けて今日できることは、明日には一人で遂行できるようになります。このことは、協同で作業をする子どもの可能性を明らかにすることにより、私たちは、成熟しつつある知的機能の領域、すなわち、最近接の発達段階で成果をあげるに違いない、したがって子どもの知的発達の実際的水準を移動させる荷違いない知的機能の領域を明らかにすることをも意味します。このようにして、子どもが一人で遂行できることを調査することで、私たちは、昨日の発達を調査するのですが、子どもが協同で遂行できることを調査することで、私たちは、明日の発達を明らかにするのです。

しかるべき機能の成熟期は，その種の教授－学習にとってもっとも好都合な，最適の時期なのです。子どもはまさに教授－学習の過程で発達するのであり，発達のサイクルを終えるのではないという事情を考慮すれば，それも当然のことと言えるでしょう。教師は，子どもがすでに一人でできることでなく，まだ子どもができないこと，しかし教授や指導の助けがあればできることを前もって生徒に教えるのです。教授－学習過程は，常に子どもと大人との協同の形態で行われ，私たちが前に子どもの社会的発達のもっとも一般的な法則の一つとして話した，理想的かつ現実的形態の相互作用の一例です。

子どもにおける模倣の本質的な特色は、子どもが自分自身の可能性の限界をはるかにこえた一連の動作を模倣し得る点にある。だが、それらは無限に多いのではない。子どもは、集団活動における模倣を通じて、大人の指導のもとに、理解をもって自主的にすることのできることでよりもはるかに多くのことをすることができる。大人の指導のもとで、援助のもとで可能な問題解決の水準と自主的活動において可能な問題解決の水準とのあいだのくい違いが、子どもの発達最近接領域を決定する。

（中略）われわれのまえに智能年齢が同じ七才の子どもが二人いる。しかし、そのうちの一人は、ちょっとした援助で、九才の問題を解くが、もう一人は七才半の問題しか解けない。これら二人の智能発達が同じだろうか？

「学令期における子どもの知能の発達と教育の問題」
『思考と言語（旧版）上』所収（明治図書，p.268）

アメリカの研究者マックカーチは、就学前の発達に関して次のことを明らかにした。三歳から五歳までの子どもを調べてみると、子どもにはすでに駆使できる機能のグループとともに、子どもが一人では駆使できないが、指導のもと、あるいは集団の中、共同の中では駆使できるような別の機能のグループもあることがわかった。この第二の機能のグループは、五歳から七歳までの年齢では基本的には現下の発達水準にあることがわかった。この研究によって、子どもが三〜五歳のとき指導の下、共同や集団の中でできることは、同じ子どもが五歳から七歳になると一人でできるようになるということがわかったのである。このように、子どもの知能年齢だけを、つまり成熟した機能だけを算定するときには、われわれは過ぎ去った発達の総計を知るだけだが、もし成熟しつつある機能を算定するときには、発達の条件が等しい場合にその子どもに五歳から七歳のあいだにどういうことがおこるかと言うことができるだろう。

知的発達の力学と学校の成績にとっては、今日すでに成熟している機能というのは前提以上のものではなく、成熟しつつある段階の機能ほどには本質的なものではないのである。より重要なのは、成熟しつつある機能である。

(中略)

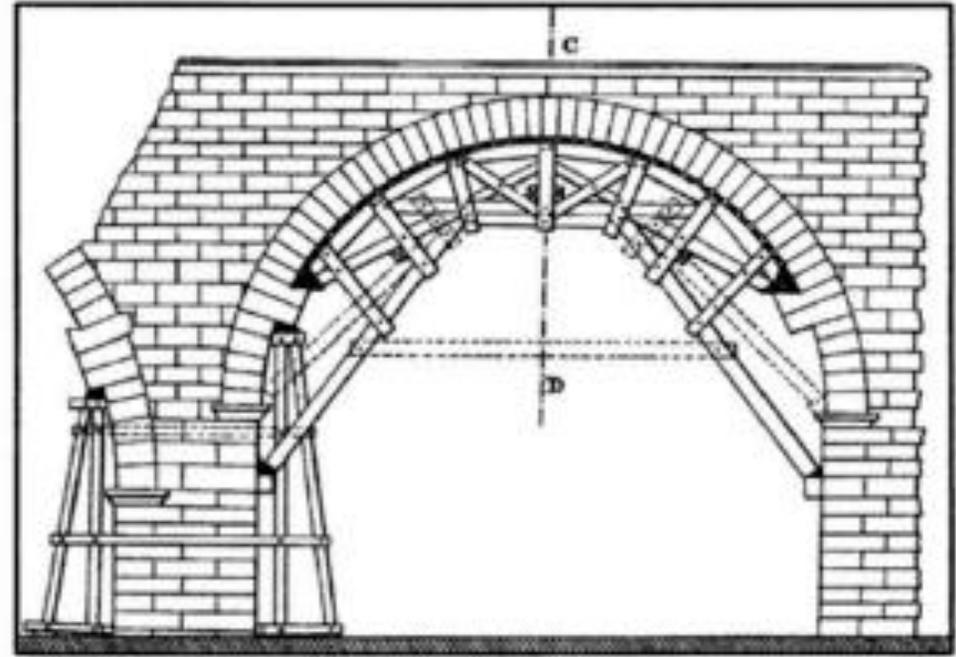
入学にあたってわれわれは、子どもが自分一人でできることを生徒にするよう要求するが、教師は子どもができるところからできないところへといつも移っていくように働き始める。学校教育の過程をこのように純粹に経験的に分析してみただけでもわかることは、学校教育は、子どもが自分一人でできることによってよりも、むしろずっと多く子どもが指導の下でできることによって想定されるべきだということである。



a



b



c (from Leger, 1875)

Figure 2. Diverse constructive contrivances that may be referred to as scaffolding.

The image (a) was retrieved from <https://pixabay.com/en/scaffold-scaffolding-site-build-2710842/>

The image (b) was retrieved from https://fr.m.wikipedia.org/wiki/Fichier:One_Times_Square_under_construction_1903.jpg

遊びは発達の最近接領域を創造する。遊びのなかで子どもは絶えず、その平均的年齢期よりも上位におり、その普通の日常的行動よりも上位にいる。遊びのなかで子どもは、頭の中で自分自身よりも年上であるかのようだ。（中略）子どもは遊びのなかで、自分の普通の行動の水準に対して飛躍をとげようとしているかのようだ。

発達に対する遊びの関係は、発達に対する教授－学習の関係に匹敵すると言わなければならない。遊びの背後には、欲求の変化と、より一般的な性格をもつ意識の変化が存在する。遊びは発達の源泉であり、発達の最近接領域を創造するのである。

幼児が、自分たちが誰であるかと同時に、誰でないか（どのような人になろうとしているのか）に、同時に関わるしかたを見ているのであり、これこそが発達のプロセスなのである。幼児は養育者とともに、発達環境を創造する。その環境が、自分以上のことをなすことを支え、今ある自分でありながら、自分になりつつあるものへとすることができるのだ。幼児は話し方を知る前に話せるし、幼児に話しかけられることばや周囲の語りの創造的模倣は、完全に受け入れられる。学習のプロセスと学習の生産物は協働で作られる。協働活動を通して、幼児と養育者、兄弟などは、学習が先導する発達環境を創造し、この弁証法の実践を通して、学習と発達の統合体を創造する。

ごっこ遊びで、子どもたちは、自分たちになじみのことながらを演じると同時に、彼らの能力を超えた、まったく新しいことながらを演じるのである。そして一日中やっても飽きもしない。また、私たちは、幼児がやり方を知らなくても、幼児が能力を超えて話をし、お絵描きをし、絵本を読むにまかせるのである。このような遊びのパフォーマンスとパフォーマンスする空間は、発達と学習にとって非常に重要である。そしてこれは、幼児期ばかりでなく、大人にとっても重要である。

このように考えると、発達は、自分でない自分をパフォーマンスすることで、自分が何者かであるかを創造する活動となる。（中略）ヴィゴツキーの発達の最近接領域は、能力の領域ではないし、社会的足場掛けでもない。パフォーマンスの空間であり、同時にパフォーマンスが作る活動でもあるのだ。